

チェンマイ大学での貢献 (74)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報ではタイの大学生の講義（授業）に対する対応について記す。以前にも本活動報告で既に報告したが、事態がいくらか変わったこと等を踏まえて、あらためて記したい。筆者の専門領域は農業工学（Agricultural Engineering）であり、この分野は農業土木（Soil & Water, Irrigation & Drainage）と農業機械の分野から成る。筆者は農業機械・農業機械化（agricultural Machinery & Mechanization）を主たる専門とするが、基本的には機械工学の農業への適用という概念であった。農業機械を導入して機械化を推進するにはそれなりのインフラ整備（Infrastructure settlement）が必要であり、農業土木関係の水理学（Hydrology）や水利（用）（Water utilization）学も学んだし、土と機械のインターフェイス（Soil - Machine Interface）に関する分野も専門としてきた。また実際に自らそれを実践するべく中古建設機械を入手して圃場整備をし稲作を行い、ポンプ小屋を作り川からの揚水を可能にしタイマーで設定時間に灌漑ができるようにするなど、兼業農家（Part-time farmer）としての経験も蓄えた。その理由は一般に「大学の先生は農業の実際を知らない」という社会の認識を払拭し、他の一般農家とも普通にコミュニケーション（Communication）出来るレベルの知識を持ちたい、あるいはそれだけにとどまらず農家に与えることができるレベルの知識と経験を持ちたい、それができてこそ専門家ではなかろうか、との意欲も働いたからである。収穫後の米を乾燥して粳すりをし、袋詰めして決められた日時に農業協同組合（Farmers cooperative）に供出するべく出向くと、選別が十分でなく等級評価が低く受けとれない、と言われたこともある。一緒に出会わせた見知らぬ農家の人達が「われわれが手伝って選別してあげると親切に言ってくれるが、そのお後で「あの人は大学の先生で農業機械を教えているという情報が伝わり赤面した覚えもある。また稲の移植栽培を趣旨を直接圃場に播く直播栽培に変えることができればアジアの農業を劇的に変えることが出来るのではとの思いで実践した。指導頂いた別の大学の先生からは「貴方はもう少し稲作栽培を勉強しないとイケない」と指導を頂いたが有り難いことと感謝している。と言うわけで親の遺産である水田を研究用実験圃場として使うことにした。この背景には上記したような目的もあったが、一般農家が自分の農地を使って試験をやっている失敗時には多額の損失を出し、その年を食いつなぐことができない。しかし自分は失敗しても大学教員（University professor）という別収入があるから、率先してそうした事に取り組むべきと考え、それが社会貢献にも成れば、いやそうした貢献をするべきと考えた次第である。

ところで土と機械の関係を扱う分野はテラメカニクス（Terramechanics）と言い、特に不整地（Off road）での機械車両と土との関係で如何に走行性（Trafficability）を良くし、

困難な走路を踏破 (Negotiation) するかなどについて研究もしてきた。すなわち農業機械 (Agricultural machinery)、林業機械 (Forestry machine)、建設機械 (Construction machine)、軍用機械 (Military machine) の不整地での性能を如何に向上するかと言う分野である。またそれら機械の自動化 (Automation) や操作性、機能向上、安全性などについてもその専門領域としてきた。しかし2000年初頭から始まった大学改組 (University reform) で農林水産業は斜陽産業との見地も働きその名称を冠した学部はことごとく四文字学部へと塗り変わるのが世の趨勢でもあった。また従来の食料生産 (Food production) に特化した農業生産のみならずエネルギー (Energy) や環境 (Environment) などの生態学的地球システム (Ecological earth system) を包括的に捉える必要が説かれた。海外の関連分野も農業に加えてバイオ・システム (bio-system)、バイオ・リソース (Bio-resources) などの名称がジャーナル (Academic Journal) や論文集 (Transaction) の新しい名称となった。食料・エネルギー・環境などの地球規模の課題 (Global issues) に対して農業が如何に重要に拘 (関) わっているかは現在では言うに及ばない。しかし世の中の移り変わりに迅速に対応できる体制にない大学や研究機関ではその活動が著しく遅れており、周りの大学や研究機関の動きについていけない。残念ながら筆者の在籍する大学の関連分野も例に漏れず、この教育研究分野そのものを単独で立ち上げる事が出来ない事情があり、学部カリキュラム (Undergraduate curriculum) から関係の講義科目が消え、筆者は一時的に失職した。その後いくらかの人の支援もあって別の学科に移籍して事なきを得たが、話はそれで終わったわけではない。これまで大学院の修士課程を対象とした講義負担であったが、移籍後の別の学科では学部性を対象とする科目になった。授業を開講する最初の時間に授業に臨む姿勢、注意事項などを事細かに説明したが、やはり修士課程と学部との差なのか、事態は次第に悪化し、回数を重ねる毎に講義に出てくる学生数が減少する。殆ど毎回講義を終わるとPPT資料を配付し、同時に宿題 (Assignment / Homework) も出している。提出期限の厳守、レポートの長さ (ページ数) は概ね守られているし、英語で仕上げられている。しかし、授業に出ない理由は、出ても英語が分からないからと判断する。だから講義に出ない、しかしレポートは提出されてくる。と言う事は出された宿題にのみ解答してレポートを期限までに提出すれば良いと大方の学生が考えている。出席している学生も余り耳をそばだてて聞いている様子はない。スマホをいじり、下を向いて、内職をして居る。いくら注意してもその姿勢が繰り返される。両手を打って注意を喚起するがその時だけで、質問をすると全く反応がないし、知らない。わずか2名の学生のみが反応してくるだけであとの大多数は全く反応がない。学部と修士ではこんなに違うのかとさえ考えさせられる。英語が分からないから授業に出てこない。出てこなくても科されたレポートを提出期限までに仕上げ英語で提出するという行動から推察できることは、レポートの課題をインターネットで調べ、コピー (Copy) しペースト (Paste) して提出していると考えられる。このことは勉強ではなく、コピーして居るだけで知識には殆どなっていない事に通じる。結局、積極的に勉強しようという意思や、興味、関心はなく、コピペで全てが済むと

考えているようである。

毎年1月の下旬になると卒業式 (Commencement / Graduation ceremony) が行われる。王室のシリンドン王女が来られて卒業生一人一人に卒業証書を授与する。筆者はこのイベント (Event) を10年以上も観てきた。日本と異なり国家が如何に次世代の人材教育に力を注ぎ、彼らに期待しているかと言う姿勢の表れと高い評価と尊厳を持って捉えてきた。しかし、自分が受け持つ授業で何が起きているか、と言う実情を目のあたりにする時、これまで持ち続けてきた思いは崩れつつある。「何だ、コピペ (Copy & Paste) で卒業が出来るのか」と言う情けなく、また悔しい思いである。思い切って留年、落第という処置もできないわけでもない。しかし一方では既述したように、英語でのコミュニケーションができないのか、はたまた問題の内容が理解できていないのかの判断が難しいから極端な早合点にならない配慮も必要である。帽子をかぶり、あるいは手に持ち、ガウンをまとい荘厳な卒業式で規律正しく一糸乱れぬ行動で粛々と証書を受け取る光景は身の引き締まる思いをさせるが、現在目の前で起きている現実、卒業に至る中身を注視すると極めて複雑な思いを隠せない。「どうか頼むから勉強してくれ(Please, please study)」と何度も頼み、わらにもすがる思いで懇願にも似た形で訴えているが、今ひとつ臨むレベルの反応が得られていないのは残念である。

本来授業に出て来なくても、出てきたときに筆者が繰り出す質問にいくらかでも反応するのならまだしも、全く知らない戸言う反応である。これは極めて大きな驚きであり衝撃である。基本てきに授業に出なくても「それぐらいは知っている」と言うのであれば出てこなくても理解はできる。しかし「えー、こんな事まで知らないのか、これで学部4年生なのか」と再び大きなショックである。国家や王室の期待に応えるしかるべき反応からは程遠いと感じるのは筆者が少数派なのであろうか。



記念写真撮影用背景スポット



王女様より証書を授与される卒業生



記念写真撮影用背景スポット 卒業証書を光景に見入る学生の親